
“ 1 ” から始まる異世界冒険

Xronos

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

“ 1 ” から始まる異世界冒険

【Nコード】

N9346R

【作者名】

X r o n o s

【あらすじ】

突如ゲームの世界に引きずり込まれた主人公：リユート（Lv1）犯人と思わしき人物からの手紙には『元の世界には帰れない』！？今日一日を生きる、生活系？異世界ファンタジー

注・現在初心者的な話ですが、中盤や後半からはチート気味になるかも？

【チュートリアルブック】（前書き）

ちよつとした設定公開

ストーリーが進むにつれ内容が増えていきます

ここに関してはほぼ9割自己満足かつ暇つぶしです装備。

【チュートリアルブック】

はじめに

この本は図鑑の役割を果たし、主に以下のことが自動で記録されます。

- ・身につけた技、魔法の効果や使用方法
- ・訪れた国や街の特徴
- ・手に入れたアイテム

この世界の仕組みの説明
システム

- ・この世界について
大陸が2つと多くの島々からなる

・お金

銅貨・銀貨・金貨

1 銀貨 ≡ 100 銅貨

1 金貨 ≡ 100 銀貨

1 銅貨 ≡ 100 円

・ヒトの仕組み

ヒトはモンスターを倒す、クエスト依頼をこなすといった経験を積むことによりレベルを上げることができる。

レベルが上がることでステータス基礎能力も上がる

経験の積み方によって基礎能力の上昇率が変わる

例：戦闘

近接武器の場合はSTRやVITが、遠距離武器の場合はDEXやAGI、魔法職の場合はINTやWISの伸びがよくなる。

例：依頼クエスト（戦闘以外）

力仕事ならSTRが、届け物などの移動系はAGIがあがる
易くなるなど。

・基礎能力

HP・・・生命力。これが無くなると死亡

MP・・・精神力。技や魔法を使うときに必要

STR・・・腕力。物理攻撃力と持ち運べる重量に影響

VIT・・・体力。物理防御力やHPの量、持ち運べる重量に

影響。また、スタミナにも若干影響

DEX・・・器用さ。命中率や回避率に影響

AGI・・・素早さ。命中率や回避率、移動速度、ジャンプの

高さなどに影響

INT・・・知力。魔法攻撃力や魔法の成功率などに影響

WIS・・・精神力。魔法防御力やMPの量、魔法の回避率な

どに影響

LUK・・・幸運度。命中率や回避率、魔法の回避率やクリテ

ィカルヒットなどに影響

・職業

職業は大きく分けて3種類【戦闘職】・【生産職】・【生活職】
がある。

【戦闘職】

職業

ファイターやアーチャー、メイジやヒーラーなど戦闘に関する

【生産職】

鍛冶師や薬剤師といった生産に関する職業

一応鍛冶師が薬を作ることでもあるが、成功率や品質はあまりよくない

1番はじめに習得した生産スキルの名が残る

【生活職】

市民や村人などその人の主だった生活を表したもの

一部登録などが必要（冒険者など）

中には王子や国王なども含まれる

スキル

・技や魔法の使い方

技は明確な使用の意思を持った上でその技のきつかけとなる動きをすることで発動する。

魔法は同じく明確な使用の意思を持った上でその魔法名を唱えることで発動する。

<アクティブ>

【スラッシュ】使用可能武器：剣、斧

消費MP：2

武器を大きく振り上げ、対象に向かって一気に振り下ろす。

<パッシブ>

アイテム

〔武器〕

【木剣】：片手剣

- ・ 木でできた剣、威力はあまり強くない
- ・ STR + 3

【チュートリアルブック】（後書き）

参考にした資料（敬称略）

・RPGW（・）RLD：吉村夜

本編に『モンスター図鑑』を登場させたため、こっちにモンスターについて書くことはやめました。

置き手紙：『やあ』（前書き）

初投稿

感想・意見・アドバイスなんでも募集
よろしくです^^

ちよくちよく訂正を加えます

置き手紙：『やあ』

「……キャラクタネームは、クロノ……いや、リユートっと」

この男の名前は黒野龍斗^{くろのりゅうと}、高校2年、特徴はメガネだ。というより他に目立った特徴がない。
そんな彼がプレイしようとしているのが『アナザーワールド』というRPGだ。

「種族は人間で——」

このゲームはなぜか注文をしていたわけでもないのにポストの中に入っていた。

怪しいと思いながらもケースの裏にあるうたい文句に気を引かれて起動してしまった。

「性別は男」

このゲームの売りは、

『ファイターやアーチャーなどメジャーな職業からサムライやニンジャなどマイナーな物まで多種多様な職業』

『スキルと材料しだいで自作の武器から城まで作れる自由度の高いクラフト機能』

『いつまでも遊べるクエストの自動生成』の三つ。

世界観は中世での剣と魔法の王道もので、他の箱庭ゲームとは比べものにならないくらいに広いらしい。

「外見は……まあ適当でいいか」

他にも、ステータスの成長はランダム、蘇生魔法やアイテムは無しなど説明書に書いてあることを読みながら自分の分身を作り上げていく。

「……よしつ、完成。それじゃゲームスタート!!」

ゲームスタートと表示されたボタンを押した。

* * *

まさに一瞬。目を閉じ、目を開ける。この作業を行った先にあったのは先ほどとはかけ離れた光景だった。

「……………はあ？」

彼が最初に目にしたのは小さな小屋だ。
森の中にたたずむ木造の小さな小屋。
ぽかーんと口をあけ、微動だにせずじつくりとその小屋見つめる。

——いやいや、おかしいだろ？ さっきまで自分の部屋でゲームしてただろ？ 何でこんな所にいるんだよ。

そんなことを考えながら現状確認。
ジャージよし。メガネよし。靴はなく、なぜか裸足。
部屋に居たときとまったく同じ服装だ。

ふと視線をそらすとそこには立て看板。近づいて読んでみると内容はいたってシンプル。

『小屋に入れ』

——なんで命令口調なんだよ……。

他にアテもないので仕方なくその命令に従う。一応ノックはしてみたが返事はない。

「とりあえず、お邪魔します」

中に入るとそこには剣や弓などの武器が数種が壁にかけてありと部屋の中央の机にはリュックや地図といった道具類が有った。

——やっと理解、此处はきっとゲームの中だ。

それぞれの武器や道具の上に【木剣】や【木の弓】など名前が浮いており、他にも【HPポーション】や【MPポーション】など、見た感じがゲームっぽかった。まず間違いはないだろう。

机の上に置き手紙らしき物を発見。次の命令かなと思いつつ広げてみた。

『やあ』

——今度はずいぶんとフランクだ。

『いきなりこんな所につれてこられて驚いただろう？　ここは君がさっきプレイしようとしていたゲームの中だと思ってもらってかま

わない。正確にはすこし違うけれど、それはその机にある【チュートリアルブック】に詳しく書いてあるからそっちを読むといい』

——おk、把握。

『元の世界に帰る方法はないよ、だから残りの人生をここで過ごすといい』

——まさか、いきなり帰る方法がないと言われるとは。別の世界に連れてこられてからの最初の目標となる【元の世界に帰る方法を見つける】ができないとは……。

『他にもできることならいくらでもあるだろう。例えば冒険者として生涯を過ごすなり、商人として世界をめぐるなり、どこかで国をのつとつて王になったりとにかく君の自由だ。』

——自由……ねえ

『あと注意してほしいことが二つ。一つはここでの死は本当の死だ。どこかで復活できるとか、蘇生アイテムなんてものは無い。君はこの世界で生きているんだということをしっかり理解しておいてくれたまえ』

——。

『もう一つはレベルが“1”からのスタートだということだ。よくある小説などでは俺TUEEや俺SUGEEの状態から始まることがあるらしいが、君はそうでない。油断して森から出た瞬間に雑魚モンスターに殺されるなんてことの無いように。それじゃあ、よい人生を……』

手紙はどうやらこれで終わりのようだ。

まるで夢見たいな話だが、これは現実なのだろう。まあこれは慣れだな、うん。

実際、この状況をものすごく楽しんでいる。

「おっと、そういえば、チュートリアルがどうとか言ってたな」

この世界で生きていくための知識を得るため、また本格的に活動していくために、そのそばにあった本に手を伸ばした。

道中、失礼します

「……………それにしても、本ツ当に弱いなあ」

自分のステータスウィンドウを眺めながら、そうつぶやく。

【チュートリアルブック】を読んだおかげでステータスウィンドウの開き方や、技や魔法の使い方などの基本操作。じぶんの身体能力について知ることができた。

実際に自分のステータスを開いてみて出てきた数値が、

『HP：50 MP：20』

これが無くなるということイコール「死」だ。
根性などではどうにもできない、この世界での常識だ。あたりまえ

「でも、どうしようもないしな……………」

その言葉と一緒に、一瞬感じた怖気も外に吐き出した。

「……………さてつと、とりあえずは街にでも行きますか」

小屋にある道具をリュックに詰め込み、木剣を装備してこの森を後にした……………。

* * *

あの小屋には、ポーションのほかにもこの地域の地図や方位磁針

などもあり、防具の類は見当たらなかったが靴だけはなぜかあった。ここにつれてきた人物は一応媒体をゲームにしていたことから靴だけはと思ったのだろう。

いまは、地図に載っている一番近い街『プルミエ』へと向かっている。

遮蔽物の何も無い広い草原を歩いているので、すでに町は見えているがおよそ1時間はかかる距離だ。

「日も傾いてきたし、すこし急ごうか……ん？」

ギイイイイイ、ギイイイイイ

突然獣の鳴き声らしきものが。

声のするほうを向くと、そこにいたのは猪。

正確な名前は【ワイルドボア：lv3】

やはり頭の上にHPバーと名前が浮いていた

大きさは腰くらい、それがこちらに向かって突進してきた。

（いきなりレベルが上だが、猪といえば直線。うまくかわせばなんとかなる！）

そう考え、木剣を持ち直し右へと跳躍。

自分の脇を通り抜けたところを追いかけ、ケツに思いっきり剣と叩き付けた。

さすがに木剣では傷はついていないが、今のでHPが5分の1減った。

そのまま、顔をこちらに向けたときに横から一撃。

顔に当てたときのほうが威力が大きかった。
残りは半分。

今のでよろけているうちに後方へステップ。
とどめはスキルを使ってみることにした。

心の中で、唯一覚えていたスラッシュを念じ、剣を振り上げた。
すると、驚いたことに体が自然と相手に向かって駆け出した。
自分ではほとんど力を入れているつもりは無いのだが、先ほど自分で剣を振ったときより明らかに早くボアの脳天を捉えた。

「・・・・・・・・・・はあああ」

この世界手の初戦闘は何とか勝利。戦闘のコツもすこし身につけることができた。

初勝利の余韻を感じていると、

『ピンピロピロリローン』

とどこからか音が鳴った。

もしかやと思い、ステータスウィンドウを開いてみると、レベルが2に変わっており、またEXPバーも半分ほど埋まっている。

ステータスも全体的に底上げされていた。

(・・・・・・・・・・ッ！)

初勝利の後に、初のレベルアップ。

戦利品として、横殴りしたときに取れた大きめの牙を貰ったことにした。

もう片方の牙も何とかしてへし折り、手に取ったそれらを見つめながら

言い知れない喜びを疲労した身体全体で感じ、気分が高揚したまま街へと足を向けた。

道中、失礼します（後書き）

戦闘なんてはじめて書いたなw

ひねりがあんまり無くてすみません。

食事。それは心も満たすもの（前書き）

意見・アドバイス募集！

誤字・脱字の指摘もついでに募集！

食事。それは心も満たすもの

「……おい！ その黒いの！」

やっと着いた街の門をくぐろうとすると衛兵らしき人物に呼び止られた。

「ここらじゃ見ない格好だな、何処から来たんだ？」

ここで正直に「異世界から来た」といったとしても、信じてもらえるどころか余計に不審者扱いされそうだな。
それならば……。

「気が付いたら森の中にいたあゝ？」

異世界云々は差し置いて事実のみ話しておくことにした。
うんぬん

嘘はついていないんだ、堂々としていれば何とかなるだろう。

「……まあ、嘘をついているようには見えないな。とりあえず荷物だけは見ておくぞ」

リュックの中、ポケットの中を調べられ異常なしということで街へ通してもらえた。

「それにしても……」 キョロキョロ

改めて街の中を見渡すと、衛兵の鎧はもちろん、他の人達の格好を見ても「コレでこそ中世！」という衣服を着ている。

さすがにコレでは自分の黒ジャージがものすごく浮いている。何

とか対策をしておかなくては……。

街に入っすすぐのところに案内板らしきものを発見。

宿屋や武器屋など主要な施設や飲食店などが記載されていた。

その中で『冒険者ギルド』というものを見つけた。

いまさらながら、この世界の文字は漢字、ひらがな、カタカナ、アルファベットと日本とあまり変わっていないことに気がついた。森にあった看板や手紙、チュートリアルブックなどは特別なのかと思っていたのだがそうではないらしい。

「ここへ行ったら何か稼ぎ口が見つかるかな」

さすがに冒険初日に飯なしの野宿だけは勘弁してほしい。
せめて何かを口に入れないと。
そう考えながら、ギルドへ向かった。

* * *

（あつ、あの肉美味そう……）チラッ

* * *

「それではこちらに名前を記入してください」

1枚のカードに自分の名前を記入する

あつちでの名前じゃなくて、キャラクター作成時につけた『リュート』を記入する。

この世界では、すべての生き物の頭上に【HPバー】・【MPバー】と名前が浮いているため偽名なんてものは使えない。

ちなみに、自分のステータスウィンドウにもクロノスと表示されていた。

自力では見ることができないが、多分頭上にも同じく表示されているはずだ。

どうやら、冒険者の手続きはこれで完了らしい。

「このカードが冒険者の証であり、あなたの身分を証明するものとしても使用が可能です」

これで、毎回街に入ろうとするたびに衛兵に絡まれることはなくなるなあ。

そんな、くだらない事を考えながらそれを受け取る。

ほかに、依頼の受け方やランクについて教えてもらった。

- ・依頼はギルドにある掲示板から、受けたい依頼書を持ってくる。
- ・依頼にもランクがあり自分と同じ、又はそれ以下の依頼のみ可能である。

トリプルエス

- ・ランクはGからSSSの10段階。
- ・ランクの昇格はそれに見合ったレベルになることと、試験を合格することが条件である。

受けた説明を要約と大体こんな感じである。

「それから当ギルドでは、受けた依頼やその依頼の達成具合を自動で記録してくれる『冒険者手帳』、倒したモンスターの換金可能部位も記した『モンスター図鑑』を取り扱っております。」

おつ、そんな便利なものが存在するのか！　して、値段のほうは？

「手帳が10銀貨、図鑑が5銀貨となっております」

……ムリダナ。

さっき換金してもらったボアの牙2つで5銅貨、1銀貨＝100銅貨なので、つまりはボアを300体倒せば何とかなる金額ということだ

さすがにそれはきつい。

受付嬢もこちらの考えを察したのだろう。

「Fランクの依頼をいくつかこなせば買える金額なので、がんばってください」

と、苦笑しながら激励してくれた。

ちよつと気恥ずかしい。

とりあえず今日は、食事代と宿代を稼ぐべく一つ依頼を請けることにした。

* * *

（ちなみに値段はつと…… 6銅、だと!? クソッ。……美味そう
だなあ）チラツチラツ

* * *

「いらッッしやいませえエエ!!」

請け負うことになった初依頼は『酒場の手伝い』

場所は、1階が酒場、2階が宿屋になっている『豊穰ほうじょうの宿』

報酬は、最低10銅（客の入り具合で変動）とその日の宿代の割
引となっていた。

この依頼は俺のように寢床が無く金も持っていないヒトがよく請
けていくらしい。

なんだか、まんまと女将おかみの思惑に乘せられた、そんな気分である。

「おっ！ 新入りか！」

「はい、そうです」

「あんまし見ねえ格好だが、何処から来たんだあ？」

「さあ？ 気が付いたら近くの森に突っ立ってました」ハハハ

「何じゃそりゃ」ガハハハ

「ハハ、ハハハハ」（酒クサッ）

「ガハハハ、つとそっぴい注文してねえな。とりあえず酒だ！」

「りょうかい」（まだ飲むのかよ……）

そんな会話を挿はさみながら注文をとっていった。

* * *

「はい、これが報酬」

酒場の掃除が終わったところに、女将から手渡された。

客の入りは上々、終了時間も予定より少し遅くなったとのこと。

そのため貰ったお金も60銅とちょい高め。

しかも、今日の宿泊代と明日の朝食代を差し引いた上でこの金額だそうだ。

晩飯がわりの賄い料理があるよといわれたが、まかな少しだけ待ってもらう旨を伝え、夜の街へと繰り出した。

* * *

(さてつと、肉、肉、肉つと) ヽヽヽ

(あれ? ここじゃなかったけ? 何で閉まっているんだ?)

(なにになに……『在庫がなくなったので、少し早めに店じまいします』……だと!?)

(……………あああああああああ!!!)

(不幸だア~~~~~)

* * *

……晩飯はおいしくいただきました。

食事。それは心も満たすもの（後書き）

もうちよつと初心者の話が続くかも？

ちなみに、こんな感じのタイトルと、真面目なタイトルどっちがいい？

（面白くなかったら、すいません）m（――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9346r/>

“ 1 ” から始まる異世界冒険

2011年4月3日11時36分発行